『貝合』の〈メルヘン〉

――〝無化〟される好色性――

井上新子

はじめに

堤中納言物語中の一編『貝合』は、主人公蔵人少将が貝合の準備に奔走する子供たちの世界を垣間見、劣勢にある継子の姫君方を観音になりすまして密かに援助する、という結構を持つ。この物語の評価としては、寺本直彦氏が述べたような、「清純な童心の世界」[1]をとりあげた明るく清新な物語、とするのが一般的である。

この「童心の世界」を発見したのが他ならぬ好色者であった、という点を重視したのが塚原鉄雄氏であり、氏は「好者を自任する少将の外出は、菩薩と拝跪される帰結となった。なんとも、奇妙なことだが、それが、茶番じみた笑劇にならずに、一種のメルヘンといった風情で形象されているところに、この作品の特性がある」[2]と評する。

さらに物語の中で好色者の存在をより重くとらえるのが、「好色性と童話性との微妙な交錯」[3]と述べた岡一男氏と、氏の見解を高く評価しそこを出発点として、「そこは人生に疲れ恋に疲れた蔵人少将にとって、汚れを知らぬ心爽やかなミニチュアの楽園であった」[4]ととらえ、なまぐさい世界に生きる好色者と清純な子供たちとを対比する神田龍身氏である。ただし、こうした見解を持つ塚原氏や神田氏であっても、例えば塚原氏が「少女たちの奉仕する、年幼い姫君への好意的な保護本能が、いつしか、少将の「をとこ」を雲散させてしまっている」[5]と述べたように、蔵人少将の好色性は子供たちとの接触によって失われると認識する。

こうした好色性を認めるか否かあるいはどの程度認めるのかといった問題は、『貝合』物語の童話性、メルヘン性の内実とも大きく関わってくるだろう。本稿では、この蔵人少将の好色性の問題を軸に、語りの問題を絡ませつつ、『貝合』に構築された世界について検討を加えてみたい。

一

『貝合』を『落窪物語』や『住吉物語』等の継子いじめの物語の系譜につらなる物語として位置づけ、その性格について論じたのは三谷邦明氏で、「継母子物語の話型の一断面、瞬間をとりだし、それだけを描く物語が生まれた」[6]と評した。『貝合』における蔵人少将の好色性をより鮮明にするために、こういった継子物語の設定のとりこみと変形について、確認を行なう。

まず、女君。『落窪物語』・『住吉物語』で年齢がはっきりと記

されないものの、結婚適齢期の娘であったものが、『貝合』では蔵人少将の視線を通して「わづかに十三ばかりにや」[7]と見える少女になっている。藤井貞和氏によれば、十二三歳で裳着、十八から二十四歳が結婚期であり、十三から十七歳もある意味で結婚期と言えるということである。[8]『貝合』の女君はちょうどこの結婚期にさしかかった、ようやく結婚が可能になった少女ということになろう。例えば、一条天皇の中宮彰子は十二歳で入内している。もっとも、この入内は政略的な思惑のため、道長が相当急いで行なったものであったらしい。その十二歳に一つ年上の十三歳が結婚にとっていかなる年齢であったのかは自ずと察しがつく。

こうした女君の若干の若年齢化に伴って、女君に忠実に仕える、『落窪物語』で言えばあこぎのような人物も、『貝合』では「八九ばかりなる」女童になっている。そして、女君迫害の中心的人物も、『落窪物語』・『住吉物語』では継母であったものが、『貝合』では女君の異母姉らしき少女になっている。

ところが、これら若年齢へとスライドした人物設定の中で、男君だけは例外である。女君と出会った時の男君は、『落窪物語』で少将、『住吉物語』で四位の少将、[9]そして『貝合』では蔵人少将であり、その官職から察するに年齢的にも社会的地位にもおそらく大差のないことがわかる。ただし、『貝合』においては、この男君の好色者ぶりが物語冒頭にエピソードを伴って記されている。もちろん、『落窪物語』の男君も、あこぎが「いみじき色好みと聞きたてまつりし物を」[10]と発言したように、もともとは色好みとして設定されていた。がしかし、『貝合』の場合はいささか様子が異なる。

長月の有明の月にさそはれて、蔵人少将、指貫つきづきしく引きあげて、ただ一人、小舎人童ばかり具して、やがて、朝霧もよく立ち隠しつべく、ひまなげなるに、　（四七七頁）

三谷邦明氏も述べるごとく、[11]この冒頭部分は『古今和歌集』や『和泉式部日記』等の引歌や典拠によって成り立ち、蔵人少将の好色者性を強調するという特色を持つ。言うまでもなく、「長月の有明の月」は、

（題しらず）　　そせいほうし

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな　（『古今和歌集』巻第十四・恋歌四・六九一）[12]

をふまえる。秋の夜長ついに西の空に有明の月がかかるまで恋人を待ち続けてしまった女の姿をかたどるこの歌の引用は、そんな女がどこかにいるかもしれぬという思いに裏打ちされた蔵人少将の徘徊を描き出す。また、『和泉式部日記』の次の箇所は、

九月二十日あまりばかりの有明の月に御目さまして、「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらむかし。人やあるらむ」とおぼせど、例の童ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせたまふに、女、目をさまして、よろづ思ひつづけ臥したるほどなりけり。　（一一三頁）[13]

「長月の有明の月」にまどろまず物思いに耽る女と、そんな女の姿

を推し量って尋ねてゆく男とを記す。「例の童(日記の前部分より小舎人童を指すことは自明)ばかりを御供にておはしまして」という帥の宮の面影は、『貝合』の「ただ一人、小舎人童ばかり具して」ゆく蔵人少将の姿とあい通じる。『貝合』の「長月の有明の月」ではじまる冒頭は、言わば大人の恋の世界をかたどったものであった。物語は、そんな大人の世界の住人である蔵人少将を子供たちの世界に引き入れたのである。

二

蔵人少将と子供たちとの接触の内実を検討するにあたって、是非とも述べておかねばならないのが、この物語の語りの視点の問題である。

すでに指摘されているように[14]、『貝合』は一貫して蔵人少将の立場から叙述がなされている。とりわけ彼の垣間見場面になると、彼と話者との眼差しが一体化するという現象がたちあらわれる。その点では同じ堤中納言物語中の一編である『花桜折る少将』と非常に近い位置にあると言えるのだが、しかし方法的に近似した両物語の間にも若干の違いが認められる[15]。

『貝合』の冒頭をもう一度みてみよう。主体が明示されない『花桜折る少将』と異なり、冒頭から男君に対して「蔵人少将」という規定がなされており、彼とわずかながら距離をおいて外側から叙述しようとする語りの姿勢が認められる。それは、無敬語表現もみられるものの、その中に混じって敬語を用いて彼の言動を規定しようとする態度[16]とも一脈通じるものがあるだろう。つまり、『貝合』は蔵人少将の視点に添って叙述がなされるが、その蔵人少将を外側からとらえようとする語りが選びとられているわけである。

こうした語りは、蔵人少将と子供たちとが互いに定位し合うというこの物語のしくみと密接に関わる。彼らの出会いの場面では、以下のように互いの視線が交錯する。

人目見はかりて、やをらはひ入りて、いみじく繁き薄の中に立てるに、八九ばかりなる女子の、いとをかしげなる、薄色の袍、紅梅などみだれ着たる、小さき貝を瑠璃の壺に入れて、あなたより走るさまの、あわたたしげなるを、をかしと見たまふに、直衣の袖を見て、「ここに、人こそあれ」と、何心もなく言ふに、

(四七八頁)

こうした『貝合』の手法は、男君の主観に大きく依存したかたちで彼の側からのみ一方的に垣間見の世界が語られた『花桜折る少将』とは、いささか異質の観がある。

三

次に、蔵人少将による好色性の発信と、それを〝無化〟[17]する子供たちの反応、そうした過程を通じて蔵人少将と子供たちとが互いに定位されてゆくさまを辿ろう。

「いと好ましげなる童べ、四五人ばかり走りちがひ、小舎人童、

男など、をかしげなる小破子やうのものを捧げ、をかしき文、袖の上にうち置きて、出で入る家」を発見し興味を抱いた蔵人少将は、そっと忍び込んで薄の中に立った。そこで「八九ばかりなる女子の、いとをかしげなる」と遭遇した彼は、「あなかまよ。聞ゆべきことありて、いと忍びて参り来たる人ぞ。と寄りたまへ」と彼女にはたらきかける。この「聞ゆべきこと」「いと忍びて」といった言葉遣いには、恋の手引きを依頼する男たちの面影が宿る。彼の好色心が覗いた発言だと言えよう。しかし、この彼の意図は彼女に届くことなく無視されてしまう。少女は彼の言葉の中身を少しも意に解さず立ち去ろうとするのである。興味を抱いた蔵人少将は、さらに少女にはたらきかける。「まろをだに思さむとあらば、いみじうをかしきことも人は得てむかし」。先の彼の発言同様好色心が揺曳しており、大人の女なら警戒しそうな発言であるが、少女は後先考えず「名残なく立ちどま」る。彼女の邪気の無さがそうさせた。少女の発言によって彼女の仕える姫君とその異母姉妹の姫君とが貝合を行なうことを知った蔵人少将は、姫君たちに関心を抱き「その姫君たちの、うちとけたまひたらむ、格子のはさまなどにて見せたまへ」と彼女に懇願する。好色性のストレートな発信である。対する少女は、「人に語りたまはば、母もこそのたまへ」と恐れる。姫君にふりかかるかもしれぬ万が一の危機への心配ではなく、男の他言によって手引きが露見した後の母親の叱責をこそ恐れるという少女の論理にもまた、彼女の未成熟な幼さが垣間見える。蔵人少将は他言の心配の無用を告げ、「ただ、人に勝たせたてまつらむ、勝たせたてまつらじは、心ぞよ」と懐柔策に出る。先の「まろをだに思さむとあらば（略）」と同発想の発言である。ここにいたって蔵人少将の下心はみえみえだが、対する少女は目先の利益に誘われ「よろづおぼえで」彼を屋敷内に導くことにする。蔵人少将は絶えず好色心を発信し続けるが、対する少女はそうした彼の下心を感知しえず疑いを持たない。両者の対比が、鮮やかである。この後蔵人少将は、生意気な異母姉妹にいじめられるかわいらしい姫君を垣間見、なんとかして継子の姫君方を勝たせたいと思うようになった。

引き続き隠れる蔵人少将の近くへ、先ほどの女童が三、四人の少女を引き連れてやって来て、味方の逆転を願い観音へ祈りをささげる。彼女がリーダー的な存在となってこうした行為に出た背景には、先にみた二人の出会いの場面が影を落としている。蔵人少将が少女に姫君の垣間見を承諾させるために発した甘言を、彼女は有難い天の救いの声にも等しいものとして受けとめた。その延長線上に、観音への祈りの行為が生まれたのである。蔵人少将は、この祈りにこたえるかたちで歌を詠んだ。

かひなしと何なげくらむ白波も君がかたには心寄せてむ

（四八二頁）

「白波」は蔵人少将自身の喩え。彼が観音になりすまして、継子の姫君方へ貝合の味方となることの決意表明の歌である。この歌に彼の好色心を読むのは一般的でないが、しかしそうした方向の読みも一

方で可能なのではないか。第五句「心寄せてむ」は、恋歌の中では、

（題しらず）　　人まろ

みなそこにおふるたまものうちなびき心をよせてこふるこのごろ

（『拾遺和歌集』巻第十一・恋一・六四〇）

のように、「愛情を寄せる」といった意で用いられる。「かひなしと」の歌の下の句「君がかたには心寄せてむ」には、「味方をする」以上の意味合いも同時に込められていよう。観音の慈悲と蔵人少将の好色心とが交錯する歌なのである。もちろん、この歌を耳にした少女たちは蔵人少将の恋情に思い及ぶはずもなく、「観音の出でたまひたるなり」と無邪気な信頼を寄せるのみである。なお、この場面、蔵人少将から援助を引き出すため彼を観音へと仕立て上げた女童の策略かとする見方も、あるいは可能であろう。が、彼女の子供らしい純粋無垢や、観音出現に際しての「おそろしくやありけむ、つれて走り入りぬ」という反応を勘案すると、女童の策略の線はみない方が自然であろう。

そしてついに、蔵人少将は観音を装い少女たちに貝合の援助をする。彼は様々な貝を入れた洲浜を、例の随身に命じて匿名で南の高欄に置かせた。その洲浜に結び付けた歌、

白波に心を寄せて立ち寄らばかひなきならぬ心寄せなむ

（四八四頁）

「白波」は前歌同様蔵人少将を指す。「私に心を寄せて頼りにしてくれるなら、その甲斐ある援助をしてさしあげましょう」と、観音を装う蔵人少将の子供たちへの援助の心の表出として一般に解されている。ただし、もう一つの読みの可能性も否定できない。第五句「心寄せなむ」の「なむ」を他に対する願望の意ととる解釈である。早く、松尾聰氏はこうした説の存在を紹介した。[18] また大槻修氏は通説に従いつつも一方で、

なお、「心よせなむ」を、他に対する願望の意として、「私が立ちよったら、頼りがいのある心をよせてほしい」とも解けよう。[19]

と述べている。ただし、松尾氏は、以下に引く理由をもってこの説を最終的に退けた。

文法的にはこのようにも考えられるが、少将は、そうした好色心を一切すてて童心に浄化された心もちでこの歌をよんでいるものとみる方が自然だと思われるから、前の歌とも関連して、普通の解に従っておきたい。[20]

しかしながら、これまで検討してきた蔵人少将の好色心の存在を勘案するなら、どちらの方向の解釈も可能になってくるのではなかろうか。ここで、和歌の世界における「白波」「立ち寄る」という語の使われ方をみてみたい。

女のあはず侍りけるに　　（よみ人しらず）

白浪のよるよる岸に立ちよりてねも見しものをすみよしの松

（『後撰和歌集』巻第九・恋一・五九九）

あひしりて侍りける人を、ひさしうとはずしてまかりたりければ、かどより返しつかはしけるに

住吉の松にたちよる白浪のかへるをりにやねはなかるらむ

（『後撰和歌集』巻第十・恋二・六六一）

「白浪のよるよる岸に立ちよりて」と「住吉の松にたちよる白浪」とは、ともに男が女の許に立ち寄るさまを表わす。またこれは「波」『寄る」の例だが、『源氏物語』若紫巻に次のような贈答歌がある。北山の垣間見によって発見した紫の上を引き取りたいと願う光源氏が直接彼女に逢いたい気持ちを、

あしわかの浦にみるめはかたくともこは立ちながらかへる波かは[21]

（一、三一六頁）

と表出したのに対して、彼女の女房である少納言は、

寄る波の心も知らでわかの浦に玉藻なびかんほどぞ浮きたる

と返歌した。「波」には源氏が、「寄る波」には紫の上に恋心を抱いて言い寄る彼の姿が託されている。『貝合』の「白波に」の歌の第三句「立ち寄らば」の主語は通説では姫君方となるのだが、恋歌の世界におけるこうした「白波」が「立ち寄る」という関係を考慮すると、主語を「白波」（つまり蔵人少将）とすることも不自然なことではないだろう。当該歌は、「私に愛情を寄せて、白波が立ち寄るように私があなたに立ち寄ったら、頼りがいのある心を寄せて欲しい」とも解されるのである。よって、この歌も先の歌同様、蔵人少将の好色性を内に秘めた歌としてとらえなおすことが可能である。その後蔵人少将が例の女童にかけた言葉「さて、今日のありさまの見せたまへよ。さらばまたまたも」は、こうした彼の好色性の延長線上にあるものとしても認識できる。対する姫君方の反応は、「いみじく喜びて」「昨日の仏のしたまへるなめり」「喜び騒ぐ」等が示すように、終始そこに観音的なものをみるのみであった。

『貝合』において、蔵人少将の好色性は純粋無垢な子供たちによって常に〝無化〟されるという構図が浮かび上がる。つまり、彼の欲望は子供たちの視線によって新たに定位しなおされているというわけである。そしてこのことは、子供たちの純粋さを逆照射する格好となっている。

四

ところで、「好色者による少女の垣間見」という設定は、当然のことながら周知の『源氏物語』若紫巻の北山の垣間見を想起させる。『貝合』は、恐らくこの若紫巻を意識して成った物語であろう。両者の比較から、これまで確認してきた『貝合』の特性を相対化したい。

光源氏が北山で発見した少女のちの紫の上は、源氏の視線によって「十ばかりにやあらむと見えて」ととらえられており、「わづかに十三ばかりにやと見えて」と蔵人少将によって発見された『貝合』の姫君の方が幾分年上である。当時の紫の上はまだまだ結婚には程遠い少女という観があるが、すでに確認したように、『貝合』の姫君はぎりぎりの線ではあるものの一応結婚可能な年齢に達した少女として設定されている。若紫の場合は、このように幼稚な少女であ

ったにもかかわらず、彼女に将来の恋人としての姿を期待した源氏が彼女を引き取りたいと申し出る。その申し入れは、祖母君たちによって男君としての好色心と曲解されてしまう。それが拒絶の一要因となった。これに対して『貝合』は、姫君の周囲をかためる女童たちによって蔵人少将の好色がそれと認識されず、かわって観音の慈悲と絶賛されることとなった。『貝合』は、『源氏物語』若紫巻をもう一段ずらした設定だと言えよう。

そして物語は、大人の世界に生きる蔵人少将と子供の世界に生きる少女たちとの対照を鮮やかに映し出した。子供たちの純粋無垢が蔵人少将の好色性を終始〝無化〟し続け、彼女たちの周辺を観音の出現可能な空間にしたと言える。そこに、ある種〈童話〉的・〈メルヘン〉的世界が現出したのではないか。

おわりに

以上、『貝合』に描かれた〈メルヘン〉の内実を、蔵人少将と子供たちとの関わりを軸に検討してみた。はじめにも述べたように、従来、蔵人少将の好色性は子供たちとの接触によって失われると考えられてきた。が、彼の発言や詠歌を検討すると、終始好色性が揺曳しており、それが子供たちには観音と受け取られるといった構図が存すると考えられる。つまり、彼の好色性はことごとく子供たちの純粋無垢によって〝無化〟され続けたのである。好色性と観音的なるものとの「交錯」[20]、それがこの物語の〈メルヘン〉を創出しているのだと言えよう。

〔注〕

(1) 日本古典文学大系『堤中納言物語』(岩波書店、一九五七年)解説、三四二頁。

(2) 新潮日本古典集成『堤中納言物語』(新潮社、一九八三年)、一一六頁。

(3) 「堤中納言物語とその心理分析」(日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅲ』有精堂、一九七九年　所収)。なお、初出は『古典と作家』(文林堂双魚房、一九四三年)。

(4) 「ミニチュアと短篇物語――『堤中納言』――」(『物語文学、その解体――『源氏物語』「宇治十帖」以降――』有精堂、一九九二年　所収)。

(5) 塚原氏、前掲書。

(6) 「平安朝における継母子物語の系譜――古『住吉』から『貝合』まで――」(日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅲ』所収)。なお、初出は、早稲田大学高等学院「研究年誌」第一五号(一九七一年一月)。

(7) 日本古典文学全集(小学館)より引用。

(8) 『物語の結婚』(創樹社、一九八五年)

(9) ただし、古本住吉では「侍従」であった。

(10) 日本古典文学全集(小学館)より引用。

(11) 「堤中納言物語の方法――〈短篇性〉あるいは〈前本文(プレテクスト)〉の解体化――」(『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年　所収)。
(12) 新編国歌大観より引用。以下和歌の引用は同書に拠る。
(13) 日本古典文学全集(小学館)より引用。
(14) 注(11)に掲げた三谷氏論文。
(15) 『花桜折る少将』の語りについては、拙稿「『花桜折る少将』の語りと引用――物語にみる〈幻想〉――」(『国文学攷』第一四七号　一九九五年九月　掲載予定)において別に論じた。
(16) もちろん『花桜折る少将』の冒頭にも一部敬語表現がみられる。が、その頻度及び心内語的性格を帯びた語りからは、やはり両者の質的な差異が看取されるだろう。
(17) 本稿では、「消失」あるいは「消滅」等とは異なる現象であることを明確にするために、「無化」という用語を用いた。
(18) 『堤中納言物語全釈』(笠間書院、一九七一年)、二一一頁。
(19) 新日本古典文学大系『堤中納言物語』(岩波書店、一九九二年)、五七頁。
(20) 注(18)の松尾氏著書。
(21) 日本古典文学全集(小学館)より引用。
(22) 先に引用した岡氏論文において使用された用語だが、この場合最適であると判断したので用いた。ただし、岡氏は引用文以上詳しく説明していないので、本稿で用いた文脈と岡氏の使用した文脈とが同一であるかどうかは不明。なお、題名の『貝合』は、問題にした「白波に心を寄せて」の歌の「かひなきならぬ心寄せなむ」に象徴される、蔵人少将の新しい恋への期待や子供たちの御利益への期待を勘案すると、ともに「かひ(甲斐)」あることを願った、蔵人少将と子供たちとの「かひあはせ」という意味合いが込められているとみることもできよう。

〔付記〕本稿は、平成七年度広島大学国語国文学会秋季研究集会(平成七年十一月十九日)にて「『貝合』の世界――〈メルヘン〉に仄みえる好色性――」と題して口頭発表したものに加筆しまとめたものである。席上貴重な御意見を賜わった諸先生方に記して御礼申し上げる。また、本研究は平成七年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果である。

――いのうえ・しんこ、日本学術振興会特別研究員――